近代アイヌ教育史とその研究の課題

制度の俯瞰から実態の解明へ

近代愛努教育史及其研究課題

從制度的俯瞰到實態的解析

Modern History of Ainu Education and its Research Topics

From an Overview of the System to an Analysis of the Reality

小川正人
北海道立アイヌ民族文化研究センター
研究課研究職員
呂青華 翻譯

アイヌ史における近代―19世紀後半以降の、いわゆる明治維新を挟んで、日本が北海道を明確に自国家の領土に組み込み、大量の移民を送り込んで開拓政策を開始していく時代――は、アイヌ民族にとって、伝統的な生活基盤が大きく侵食され、諸般の法制度は移民と開拓政策を優先するかたちで制定され、伝統的な文化や言葉は否定されるか、せいぜい好奇の対象となる、といった、様々な圧迫を腹背に受けた時代でし。

開拓使（明治の始めに日本政府が北海道管轄のために設けた官庁の名称です）がアイヌ児童の教育のために最初に設置した学校は、樺太（サハリン）のアイヌのうち800余名を強制移住させていた石狩地方の対雁の学校でした（1877年設立。強制移住とい

愛努史上的近代―19世紀後半以來，包含所謂的明治維新時期，日本明確地將北海道納入國家領土，並遣送大量移民，啟動開拓政策的時代――對愛努民族來説，傳統的生活領域大受侵蝕，諸般法律制度都以移民和開拓政策為優先考量而制定，傳統的文化和語言被否定，或者好一點也成為他人好奇的對象而已，是腹背均承受各種壓迫的時代。

開拓使（明治初期日本政府為管轄北海道所設的官廳名）最早為兒童教育所設的學校在石狩地方的對雁，該校是開拓使強制庫頁島800餘名愛努移住之後設立的（1877年設立，所謂的強制移住，是日本和蘇聯在交換南庫頁島和

うのは、日本とロシアが南樺太と千島の領土交換を行った際に、アイヌは日本の統治下にあると主張し続けた日本が、その主張の辻褄を合わせるために北海道に移住させたものです）。最初の学校が強制移住地に設置されたものだったということは、日本国家にとってのアイヌ児童に対する学校の位置付けを象徴していると思います。すなわち、日本国の統治にとって適合的であらしめるための施設だということです。従って、そこでの教授内容は、もっぱら日本語や日本の秩序意識を注入しようとするものであり、アイヌ語やアイヌの伝統文化に価値が置かれることはなく、「未開」だと見なす風潮に支えられていました。

政府が1899年に制定した「北海道旧土人保護法」（「旧土人」とは、政府がアイヌを行政上区別する際の呼称として定めたものです）は、近代日本のアイヌ政策の骨格となった法律ですが、その眼目の一つも教育にありました。同法は、アイヌ児童が多数居住する地域には政府が費用を負担して小学校を建てることを定め、同法の下で北海道庁（北海道を管轄する官庁は1886年から北海道庁という組織になりました）は「旧土人児童教育規程」（1901年）などを定め、アイヌ児童に対する小学校教育の教授課程を制度化しました。

「北海道旧土人保護法」による学校の設置は、北海道全体の平均に比べて極めて低かったアイヌ児童の就学率（1897年で全道平均50%強に対し、アイヌ児童

千島領土之際，堅持主張愛努人仍應受日本統治，為配合該主張所施行的強制遷移）。第一所學校設在強制移住地對日本來說，象徵著國家對愛努兒童學校的定位，亦即符合日本統治目的，而且是為施行統治的機構設施。因此該校的教授內容，以灌輸日本語和日本式的秩序觀念為主，愛努語和愛努傳統文化不具任何的價值，得到視為「未開化」的風潮所支持。

政府於1899年制定的「北海道舊土人保護法」（所謂的「舊土人」是政府在行政上為區別愛努人所訂的稱呼）是構成近代日本愛努政策骨架的法律，其重點之一也在教育。該法明訂：多數愛努兒童居住的地區，應由政府負擔費用，設立小學。根據該法，北海道廳（管轄北海道的官廳自1886年改為北海道廳）另訂「舊土人兒童教育規程」(1901年)等，將愛努兒童的小學教育的教授課程制度化。

「北海道舊土人保護法」下所設置的學校，是為了提高，和北海道全體的平均就學率相較明顯偏低的，愛努兒

24.5%）を引き上げようとするものでした。1910年までの約10年間で北海道内に24校が設置され、アイヌ児童の就学率は1910年代には90%以上にまで急速に上昇し、その一方で、アイヌの家庭・社会からアイヌ語などの伝統文化が急速に姿を消していきました。1937年に至って政府は、アイヌの「同化」が進行したと謳い、「北海道旧土人保護法」を大幅に改正して学校の特設制度などを廃止し、現在に至っています。

——こうして制度や統計だけを概観してみると、近代日本のアイヌ教育政策は、いわゆる同化主義を強力に推し進めたように見えます。確かにアイヌの社会に対する同化主義の圧力は相当なものがありました（端的な状況の例は人口比です。北海道内だけの人口比でも、1910年頃にはアイヌは全体の1%未満となり、圧倒的な少数者になったのでした）。しかしながら、政府や北海道庁の姿勢を見ると、アイヌの教育そのものには行政上の手間や予算を極力節減しようとしています。例えば学校の設置・維持の経費は極めて少額でした。近代アイヌ史上で一部の熱心な教員やキリスト教伝道者の活動が脚光を浴びたのも、そのような行政の姿勢ゆえに個人の献身ぶりが際立って見えたためでもあったのです。

また「北海道旧土人保護法」により特設された学校は、しばしば「視察」や「見学」の対象となりましたが、それは、アイヌ児童ばかりを集めた授業が見世

童的就學率（1897年全道平均就學率為50%，愛努兒童24.5%）。截至1910年的10年之間，北海道內共設有24所學校，愛努兒童的就學率在1910年代快速竄升到90%以上，與此同時，愛努語等傳統文化也加速地從愛努家庭和社會退出而趨於消聲匿跡。到了1937年，政府宣布愛努的「同化」完成，因此大幅修正「北海道舊土人保護法」，廢止學校的特設制度等，一直到現在。

——僅就制度和統計概觀，便可窺知近代日本的愛努教育政策等同強力推動所謂的同化主義。對愛努社會來說，同化主義的壓力確實相當大（極端的例子就是人口比。1910年左右的愛努人口不到全北海道人口的1%，是壓倒性的少數）。不過，從政府和北海道廳的作風態度來看，他們有意極力縮減行政手續和預算。例如，學校設置和維持的經費金額相當少。近代愛努史上，部分熱心的教員和基督教傳教士的活動能嶄露頭角，也就是因為這種行政態度，才凸顯出個人獻身教育的熱誠。

因「北海道舊土人保護法」特設的學校，經常成為「視察」和「觀摩」的對象，意思是說，全愛努兒童的教學簡

物扱いを受けているようなものでした。特に、交通の便のよい白老や帯広、旭川などの学校には毎年多くの「見学」者が訪れ、教員の記録によれば観光地のような様相を呈したこともあったといいます。当時、アイヌ児童を対象とした学校は「土人学校」という蔑称が通称のようになっていました。1920年代にアイヌの歌人として知られた違星北斗の作品の中にも、「白老は／土人学校が／名物で／アイヌの記事の／種の出どころ」という、このような時代を直裁的に描いたものがあります。また、「旧土人児童教育規程」の定める教授課程は、アイヌ児童に対する日本語などの注入を徹底することを優先し、教育課程全体を「簡易」な程度に押しとどめるものでした。総じて言えば、政府・北海道庁は学校を普及させようとする構えは見せましたが、アイヌ自身が学問を身につけることは為政者の目的ではなかったのです。

このような近代の中にあって、社会で生きていくための切実な手だてとして、あるいはもっと単純な知的好奇心といった、さまざまな動機や事情により、学校・教育に関心を寄せ、習得していくアイヌが多くいました。行政がなかなか学校を設置してくれないので、自ら学校や教員の誘致に動き、あるいは私財を投じて学校を設置した者もいます。老朽化した校舎の増改築などに当たっても、地域のアイヌが労力や資材を提供した例が多く見られ、少しでもよい教育条件を自ら獲得しようとした人々の意欲を感じます。また、学校の

直是一種展示品。尤其交通比較方便的白老、帶廣、旭川等地的學校，每年都有大量的「參觀」者來訪，根據教員的記錄，盛況就跟觀光景點沒有兩樣。當時，以具有歧視意涵的「土人學校」通稱全愛努兒童的學校。1920年代，以愛努歌人（譯按：短歌作者。短歌是日本文學形式的一種，音律為五七五七七）而聞名的違星北斗，他的作品「在白老/土人學校/是名勝/愛努大事記/泉源的出處」，直接了當地描繪出那個時代的情況。「舊土人兒童教育規程」中所訂定的教授課程，以徹底灌輸愛努兒童日本語等為優先考量，整體的教育課程停留在「簡易」的程度。總而言之，政府及北海道廳呢，的確展現了普及學校的格局形式，然而，讓愛努求得學問並不是為政者的目的。

在這樣的近代下，為求得在社會上生存所需的實質技能，或單純只是對知識的好奇心所驅使等各種動機或理由，對學校、教育投入關心和學習的愛努很多。然而，行政部門遲遲不願設置學校，因此有人自己招攬學校和教員，或以私人財力設置學校。增建或改建破舊學校校舍時，經常可以看到地方上的愛努人提供勞力、物材的例子，我們可以感受到這些人期望以自己的力量獲得更好的，即使是一點點的教育條件，所投入的熱

教員はほとんどが和人（アイヌ以外のいわゆる多数派日本人）でしたが、アイヌ児童に対する取り組みが怠惰な教員に対して、地域の人々による排斥運動が起きたという記録も見られます。

つまり、学校と教育の問題は、アイヌに対する統治政策とアイヌ自身による近代化への取り組みとが対峙し合う大きな焦点の一つだったと私は考えています。その歴史を調べることは、近代日本のアイヌ政策と近現代を生きたアイヌの足跡との、それぞれの実相を考えることにつながると思うのです。私はかつて、近代日本のアイヌ教育政策を、アイヌ児童を対象とした学校教育制度の歴史を中心にして調べました（『近代アイヌ教育制度史研究』1997年）が、現在は、より具体的な各地域での学校の歴史を、行政の施策と、地域のアイヌの対応や取り組みのそれぞれに注目しながら調べる必要を感じ、作業を開始しています。

ここで私の研究と現在の職場について述べたいと思います。私が勤務している「北海道立アイヌ民族文化研究センター」は、北海道が1994年6月に設立した機関です。アイヌ文化に関する調査研究のほか、アイヌ文化に関する貴重な資料の収集・保存・整理や、アイヌ文化に関する学術情報の収集・整理などを行い、これらの成果を広く公開し提供していくことを主な業務としています。所長のほか、研究課（研究スタ

情和用心。當時學校教員幾乎都是和人（即愛努人以外佔大多數的日本人），對於在愛努兒童教育工作上怠惰的教員，地方人士發起排斥運動的紀錄，也時有所見。

換句話說，我以為，學校和教育的問題，是導致愛努的統治政策和愛努人本身對近代化的配合兩者互相對峙的重大焦點之一。調查這段歷史，想來是可以連結到近代日本的愛努政策和近現代愛努生活足跡兩者真相的思考。過去我曾針對近代日本的愛努教育政策、以愛努兒童為對象的學校教育制度史做過調查（《近代愛努教育史研究》1997年），而現階段，深感有必要更具體地對各地區學校的歷史、行政部門的實施方案、地方上愛努的因應和配合等等，予以重視和調查，因此開始著手進行研究。

接下來，我想談談個人的研究和工作單位。我任職的「北海道立愛努民族文化研究中心」乃北海道於1994年6月設置的機構。除了愛努文化的相關調查研究之外，與愛努文化有關的貴重資料的收集、保存、整理，愛努文化相關的學術情報的收集、整理，研究成果的公開、提供、推廣都是主要的業務。編制方面，除所長外，研究課（研究人員）

ッフ）6名、総務課（事務スタッフ）3名、合計10名の小さな組織ですが、アイヌの伝統文化の中でも、言語（アイヌ語、口承文芸など）、芸能（歌や踊り）、生活技術（民具の製法・使用法など）のいわゆる無形文化に属するものを中心に調査研究を進めています。私はこの研究センターの研究課の職員で、歴史分野の調査研究を担当しています。

近年、国の法律に基づく財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（1997年設立）や、北海道大学によるアイヌ・先住民研究センター（2006年設立）など、アイヌ文化の学習・研究・伝承に関わる公的な組織が相次いで発足しましたが、これらの中にあって、当研究センターは、北海道という地方自治体の設置する機関として、アイヌ文化の歴史と将来に対して北海道が果たすべき責務を意識し、基礎的な調査研究やデータの蓄積と整理に重点を置くようにしています。学校と地域の歴史を通した近代アイヌ史の研究、というのが、今の私の研究テーマであり、これは、基礎的なデータの蓄積という基調にも沿った研究課題でもあると考えています。この調査の報告をまとめていくことが、これから3～4年間をかけた、私の仕事の柱になるはずです。

6名，總務課（庶務人員）3名，是一個10人的小型組織，目前正在進行的調查研究，以愛努傳統文化中的語言（愛努語、口傳文藝等）、藝能（歌、舞）、生活技術（民具的製法與使用等）等無形文化為主。我是研究中心研究課的職員，擔任歷史領域的調查研究。

近年來，根據國家法律所設的財團法人愛努文化振興・研究推進機構（1997年設立）、北海道大學成立的愛努・先住民研究中心（2006年設立）等，與愛努文化的學習、研究、傳承有關的正式組織陸續成立，本研究中心為其中一員，身為北海道地方自治體所設立的機構，基於對愛努文化的歷史和未來是北海道責無旁貸的義務之認知，將重點放在基礎性的調查和資料的累積與整理上。透過學校和地方歷史呈現出來的近代愛努史研究是我個人目前的研究主題，想來此即沿著基礎性的資料累積這樣的理念而來的研究課題。歸納這份調查報告，應是個人未來3～4年的工作重心。

▲ 小川正人博士論文著作，1997《近代愛努教育史制度史研究》。

The Current State of Ainu Education

Struggles for Cultural Revitalization Amidst a Cumbersome Support System

愛努教育現況

在笨重的支持體系裡嘗力做文化復振

アイヌ教育の現状

厄介なサポート体制における文化再興へのちかき

Jeff GAYMAN
九州大学大学院人間環境学府
教育システム専攻教育學コース博士後期課程

陳穎柔 翻譯

圖片提供 二風谷愛努文化博物館

In today's world as globalization progresses at an alarming rate and wisdom-bearers in traditional societies pass into the "other" world, taking with them their vast repertoire of traditional knowledge and language abilities, and as "schooling" in the sense of Western school education becomes the norm throughout the earth, one exceedingly important issue for Indigenous societies is how to optimally adapt their knowledge systems and traditional pedagogies to the modern educational system so as to maintain the best of their ancient knowledge while increasing their ability to adapt to the needs of the current world. In Japan, where the Ainu culture has become largely a "culture of memory," a high degree of assimilation coupled with ambivalence arising from discrimination and prejudice about one's Ainu roots serve as obstacles limiting attention to the Ainu people's

在今日世界中，隨著全球化以驚人速度進展、傳統社會的智慧負載者帶著其龐大的傳統知識和語言能力，逐漸變成「另一個」世界的一員，同時隨著西方學校教育觀點下的「學校教育」變成全世界的標準，對原住民社會極重要的議題之一是，如何使其知識體系和傳統教學以最理想方式納入現代教育體系中，以便保存其古老知識的精華，同時提升其能力，以順應當今世界的需要。在日本，愛努文化大致已成為「記憶的文化」；高度同化，加上源自對於他人的愛努根源之歧視與偏見的矛盾心理，成了障礙，限制著對愛努人傳統知識的關注。同樣的，高等教育入學率整體而言低及

traditional knowledge. Similarly, low overall higher education matriculation rates and related relatively low socioeconomic status work to hamper Ainu people's time and financial resources available to learn their traditional culture. In this short paper I touch upon the various factors at play in this scenario, and submit that the creation of the Ainu "Cultural Promotion Act" in 1997 hasn't gone far enough in its potential capacity to address the issue of revitalization of Ainu "culture" through the vehicle of education.

其相關的社經地位相對而言低，使得愛努人可取得之用以學習其傳統文化的時間和財務資源受到妨礙。在這篇短文中，筆者觸及在此一情況中的各種作用因素，並闡述在1997年出現的《文化振興法》的潛能並無太大發揮，來處理透過教育管道以復振愛努「文化」的議題。

"Traditional" Ainu Education

In the past, education in Ainu society, as in all Indigenous societies, was direct, experiential, hands-on, practical, and conducted by all adults throughout the community, fluidly and case-by-case as occasion demanded, as part of everyday life. For example, occasions for learning public speaking were made available through opportunities to hear and practice oratory at public events such as weddings and funerals. Attitudes revolving around knowledge stressed the social dimension of knowledge transmission: a core Ainu axiom states that knowledge which the possessor cannot explain is not knowledge that they can claim to possess. Similarly, social mores concerning knowledge reinforced the utility of that knowledge; one criterion for a young man to be marriageable was the ability to carve a hunting knife.

「傳統」愛努教育

以往，愛努社會中的教育，如同所有原住民社會中的教育，是直接的、來自經驗的、實做的、實務的，是由所有成人在聚落各地實施，是依場合需要做變化，是日常生活的一部分。比如說，學習演說的時機是來自在婚禮、喪禮等公眾場合聽、練習演說術之機會。圍繞著知識轉的態度強調知識傳遞的社會面向——有一愛努精髓格言說：知識若是具備知識的人無法解釋，這些人就不能宣稱具備這知識。同樣的，與知識有關的延伸社會性強化該知識的實用性；一名年輕男性要具備結婚資格的準則是擁有雕刻獵刀的能力。

Ainu of three or four generations ago commonly possessed phenomenal memories; it was not uncommon then (and not completely unheard of now) for an Ainu man or woman to possess a minute mental map of all of the surrounding forest and mountains composed of what plants would be available where and in what seasons. Training for such memory building was promoted through action: actually accompanying someone into the mountains, aurally by listening and memorizing Ainu epics, which transmitted information as well as morals embedded in thoughtful and imaginative stories, or visually by the exercise of sitting at the edge of the hearth with an elderly relative and attempting to recreate the Ainu designs that the elder drew, then erased, in the hearth ashes.

愛努人在三、四代之前普遍擁有現象記憶；那時候（現今也不是全然未聞），愛努男人或女人腦中普遍保有一張關於周圍森林和山的小小地圖，內容是哪裡和在哪些季節可以找到什麼植物。這種記憶建構的訓練是透過行動來推展的：真的就陪某人走進山裡、聽覺上用耳朵聽愛努史詩並記在腦子裡（愛努史詩傳遞資訊與道德，這些就刻劃在富有思想和想像力的故事之中）、或視覺上與一位年長親戚坐在火爐邊，並在灰燼上試圖重新繪出這位老人家畫的愛努圖案，然後塗掉。

Nowadays, while opportunities to learn in such traditional environments do exist, they are rare. Groups such as Sapporo's Ainu Art Project, a community of Ainu families devoted to promotion of Ainu art, ceremony and music, evoke the traditional spirit of learning-through-participation explained above, and Yasuko Yamamichi's "Ainu Language School"/Community adds onto this the physical resources of traditional thatched buildings nestled at the edge of a virtually untouched natural environment. But the ironic reality of Ainu education is that the

現今，要在這樣的傳統環境中學習的機會雖然的確是有的，但很稀少。札幌的愛努藝術計畫（一個由愛努家庭組成的團體，致力於提倡愛努藝術、儀式和音樂）等團體帶動起前述的參與式學習之傳統精神，而山道康子的愛努語教室為這種精神增添實體資源，據點是傳統的草蓋屋頂建築，座落於臨界沒被碰觸過的自然環境之地。但愛努教育的諷刺事實是，其大部分是在設定和限制下

▲ 左圖：鮭魚是愛努民族的傳統食物。右圖：愛努民族的傳統糧倉。

greater part is conducted in settings and under limitations controlled by the Japanese government and its organs.

Assimilative and One-Sided History

Assimilatory policies beginning in the late 1800s acted to breakdown Ainu society and disband Ainu communities. For the past hundred and some years, Ainu traditional hunting has been banned or exceedingly regulated, traditional materials needed for Ainu architectural, culinary, artistic and folk art activities have become private commodities for a price, housing and accommodation have become modern, and, perhaps most crucially, most of the traditional knowledge-bearers who possessed the

進行的，受到日本政府及其機構的控制。

同化的與片面的歷史

始於1800年代晚期的同化政策用以瓦解愛努社會和拆散愛努聚落。過去一百多年間，愛努的傳統狩獵被禁止或被極度規範，愛努建築、烹飪、藝術和民俗技藝活動所需的傳統材料變成有價的私有商品，住屋和居所成為新式的，或許最為關鍵的，是傳統知識負載者大多數已經過世，他們是能說愛努語且已從第一手經驗獲致其傳統知識的人。主因之一是同化教育乃以日本語進行，始

ability to speak the Ainu language and had obtained their traditional knowledge from firsthand experience, have passed away. One major factor was assimilatory education conducted in the Japanese language, beginning from the early 1890s, which acted not only to eradicate speakers of the Ainu language, but also, because it was inferior to the education offered to the *Wajin* children in the same communities, instilled in many Ainu a strong desire to succeed according to Japanese standards. At the same time, not least to some extent, stigmas generated by *Wajin* settlers came to be associated by Ainu with such "illegal" traditional knowledge.

於1890年代晚期的日本語同化教育不只用以根除說愛努語者，更甚者，由於愛努教育係處於提供給同社區和人孩童之教育的下風，這灌輸給許多愛努人一種強烈欲望，要依日本標準達到成功。與此同時，在某種程度上也蠻重要的是，愛努人把和人墾殖者所造成的污名與這樣的「違法」傳統知識連結在一起。

Currently, low overall going-rates for higher education (half compared to *Wajin* Japanese in the same communities) and low socioeconomic status amongst a significant portion of the Ainu population are reflections of these historical burdens of discrimination, as well as being further fodder for repeated cycles of poverty. Meanwhile, ironically, many Ainu complain that in the struggle for making an everyday living they "do not have time" to study or practice their culture and language, or that even if they did there would have to be some kind of an economic incentive in order for them to consider it worth their while.

目前，高等教育參與率整體而言低（是同社區和人的一半）以及相當比例的愛努人的社經地位低，正反映出歧視的歷史包袱，且孕育著循環不斷的貧窮。同時，反諷的是，許多愛努人抱怨說，要掙每日生計都很拚了，他們「沒時間」學習或落實他們的文化和語言，或說，即使他們做了，也要有某種經濟誘因好讓他們認為這樣是值得的。

愛努傳統技藝教學。
（二風谷愛努文化博物館提供）

Current Ainu Education

The current Ainu educational movement in Hokkaido consists of:

◎***Children***

Study units in schools (to the writer's present knowledge, only one school nationwide has an integrated, grades 1-6 curriculum specifically giving attention to the Ainu)

2 Ainu language classes for children / 4 Parent and child Ainu language classes

◎***University***

Several Hokkaido universities offer courses about Ainu history, society and culture, as well as Ainu language classes

Komazawa Tomakomai University, a private institution, offers a specialized concentration in Ainu culture

◎***Adult***

Intermittent vocational (embroidery, carving, stone polishing), and on-the-job (Ainu language, culture) training

Ainu culture classes sponsored by FRPAC

◎***General***

Ainu language classes (14 authorized classrooms

當前的愛努教育

北海道現行的愛努教育運動包括：

◎**孩童**

學校的研習小組（就筆者所知，日本全國只有一所學校有辦專為愛努人投注關懷的六年一貫課程。）

兩個兒童愛努語教室，四個親子愛努語教室。

◎**大學**

北海道有幾所大學提供關於愛努歷史、社會、文化的課程，也開設有愛努語課。

私立苫小牧駒澤大學提供針對愛努文化的專門課。

◎**成人**

週期性的職業訓練（刺繡、雕刻、磨石）和在職訓練（愛努語言、文化）

愛努文化振興・研究推進機構贊助的愛努文化課

◎**一般**

愛努語教室（全北海道有14間獲核准的

Prefecture-wide)

Cultural preservation societies (17 designated societies Prefecture-wide)

◎***Other Organizations***

Study Groups - i.e, Kamui no mi (Ainu prayer ceremony) study group

Yasuko Yamamichi "School"

Ainu Art Project

Eteke Kanpa no Kai (Citizens-sponsored study group for Ainu children aimed at improving academic performance; a portion of the participating children are also involved in learning Ainu culture and language)

Nowadays, many, although not all of these activities take place in modern facilities, and are under funding from the Ainu Association of Hokkaido or the Foundation for the Research and Promotion of Ainu Culture (FRPAC), both of which are organs of the Japanese government. The only groups and organizations listed above completely "strings-free" from government control are those listed under the "Other" category.

Movements for Increased Ainu Control of Education

The high mark in the Ainu self-determination movement, which fostered the above-listed current

教室）

文化保存會（全北海道有17個被指定的文化保存會）

◎其它組織

研習團體：如，Kamui no mi（愛努祈禱儀式）研習團體

山道康子「學校」

愛努藝術計畫

Eteke Kanpa no Kai（由居民贊助的研習團體，旨在改善愛努孩童的學業表現，部分參與孩童也學習愛努文化和語言）。

目前有許多活動（雖非全部）是在現代場所舉辦，且受北海道愛努協會或愛努文化振興・研究推進機構資助，兩者皆是日本政府機構。前述團體和組織中完全「免於」政府控制的是那些列於「其它」類別者。

增強愛努對教育之控制權的運動

愛努自決運動的最高點發生在1984年，當時，北海道愛努協會批准了名為《愛

Ainu cultural and linguistic revitalization movement, came in 1984 with the ratification by the Ainu Association of Hokkaido of a draft proposal known as the Ainu New Law which was submitted to the Hokkaido government and the Japanese State.

The demands for education and culture were:

1. Implementation of a general policy for education of the Ainu youth

2. A plan, as part of the above policy, to teach the Ainu youth the Ainu language

3. Abolition of discrimination against Ainu in school and social education

4. Establishment of university courses in the Ainu language, culture, and history, employing capable Ainu people as professors, associate professors, and instructors unhampered by existing codes, giving special consideration to assisting Ainu youth to take these courses

5. Establishment of a national research institute to specialize in research and maintenance of the Ainu language and culture, to introduce new approaches to research in order to reverse the trend of previous one-sided research which didn't include the Ainu outlook and which treated them as objects

6. Reconsideration and improvement of the

努新法》的草案，此一提案送交北海道廳（北海道政府）和日本國政府（日本中央政府）。愛努自決運動孕育了前述的現行愛努文化和語言復振運動。

《愛努新法》的教育和文化要求：

1. 實施一般性的愛努青年教育政策。

2. 有一項教導愛努青年愛努語的計畫，做為前項政策的一環。

3. 廢除在學校和社會教育中對愛努人的歧視。

4. 設置愛努語言、文化及歷史的大學課程，排除現行慣例聘用有能力的愛努人擔任教授、副教授和講師，並做特殊考量，以協助愛努青年修習這些課程。

5. 設立一所國家級研究機構專事愛努語言和文化的研究與維護工作，並引介新研究方法以扭轉之前片面研究的潮流（過去研究未將愛努的前瞻納入，且將愛努人當做研究客體）。

6. 重新思考並改善正在產生影響的當

◀ 二風谷保育所。

contemporary efforts at force to transmit and preserve Ainu culture

In 1997, after prolonged deliberations, the Japanese government responded by creation of what is known as the Ainu "Cultural Promotion Act" (CPA), which was passed to finance cultural activities and to subsidize cultural exchange and research concerning the Ainu. Additionally, a piecemeal and snail-paced plan to "re-create" traditional Ainu subsistence areas (*Iwor*) could contribute to traditional learning, but so far in practice has not. While the Act has made concerted efforts to enlighten Japanese citizens about the Ainu situation, and to some extent has revised and reinforced the system for transmission and preservation of Ainu culture, it almost completely bypasses the role of public education in cultural transmission by literally neglecting demands #1 and #2 above, and in actuality it has done virtually nothing to respond to the latter half of demand #4.

代作法，以便傳遞和保存愛努文化。

經過長期審議，日本政府在1997年以通過名為《文化振興法（CPA）》的法案作為回應，此法旨在資助文化活動，並為與愛努有關的文化交流和研究提供補貼。此外，有一項非全面性且推行極為緩慢的計畫，用以「重新創造」愛努傳統生計領域（Iwor；狩場），這可能有助傳統學習，然至今尚未施行。雖然《文化振興法》做了結合力量的努力來啟蒙日本國民有關愛努人的情況，且某種程度改變了、也加強了傳遞和保存愛努文化的體系，但該法幾乎完全忽視公立教育在文化傳遞上的角色，表面上忽略《愛努新法》草案第一條和第二條，實際上對於第四條後半的要求根本沒作出回應。

The Future

Recently, since the passage of the CPA, demands for the issues addressed in the Ainu New Law have almost ceased to be heard. The ratification in September of the UN Declaration on the Rights of Indigenous Peoples presents a prime opportunity for the Ainu to revive their desires and consciousness regarding these educational and other issues. How they do this, and which concepts and practices they adopt from other Indigenous movements, are ultimately up to the Ainu people themselves, but the presence of a network of Indigenous research institutes such as ALCD presents a strong support.

未來

近來，自從《文化振興法》通過後，對於《愛努新法》所觸及的議題之要求幾乎銷聲匿跡。《聯合國原住民族權利宣言》在九月獲准，帶給愛努人一個絕佳機會，得以重燃其關於這些教育及其它議題的想望和意識，如何做、以及有哪些概念和作法可以採納自其他原住民運動，終將看愛努人本身，但政大原住民族研究中心等原住民研究機構所構成的網絡提供了強有力支持。

◀ 傳統愛努生活是傳統愛努教育的基礎。（二風谷愛努文化博物館提供）